

インド経済成長のなかの子ども

——コルカタで見たこと感じたこと 大阪ユニセフ協会ボランティア 近藤敦子

喧噪の町

昨年11月、インド第3の都市コルカタを旅した。かつてカルカッタと呼ばれていたこの町は20世紀初頭までインドにおけるイギリスの首都であり、その面影が色濃く残っている。しかし、古い建物がひしめくように立ち並ぶ町の中心を一步離れると、サイエンスシティと呼ばれる広大な一画が出現し驚かされる。近代的な高層ビルは職住接近のビジネスセンターとマンション群で、インドの富裕層がたくさん移り住んでいると、ガイド氏が話してくれた。

コルカタの人口は1,500万人、さらに400万人の人々が一日にこの町を出入りするという。道路やバザールは、とにかく賑やかだ。人でごった返す小路でも、車やリクシャーがのべつ構わずクラクションを鳴らしながら走り去る。一方、歩行者も負けていない。大通りに一応信号はあるが、赤信号でも構わずに自動車の間をすり抜けるように渡ってゆく。日本のように交通ルールが守られ整然とした道路とは違い、自己責任の無秩序ぶりだ。

ニューマーケットと呼ばれる商業地区の混雑は、とくにすさまじい。夕方ともなれば、家族連れやカップル、仲間同士が繰り出し、屋台での食事や露店の買い物に熱中する。まだ十代前半と見える少年は手のひらで器用に野菜を刻み、鍋で炒め、次々とカレーの注文に応じている。一

方、露店の裸電球の明かりにキラキラと輝く宝飾品や色鮮やかなサリーを売る店では、女性客が品定めに余念がない。赤や緑にきらめくガラス細工の腕輪は庶民でも手の届く値段だ。

人、人、人……押し合いとしつこい勧誘の声を振りほどきながら静かなホテルに戻ると、さすがにホッとする。しかし、町の喧噪はすさまじかったが、どの顔にも旺盛な欲望とそれが満たされる幸せが溢れていたように思えた。どこか懐かしいような高揚感。そんな空気が、コルカタに親しみを感じさせるのだろうか。

働く子ども

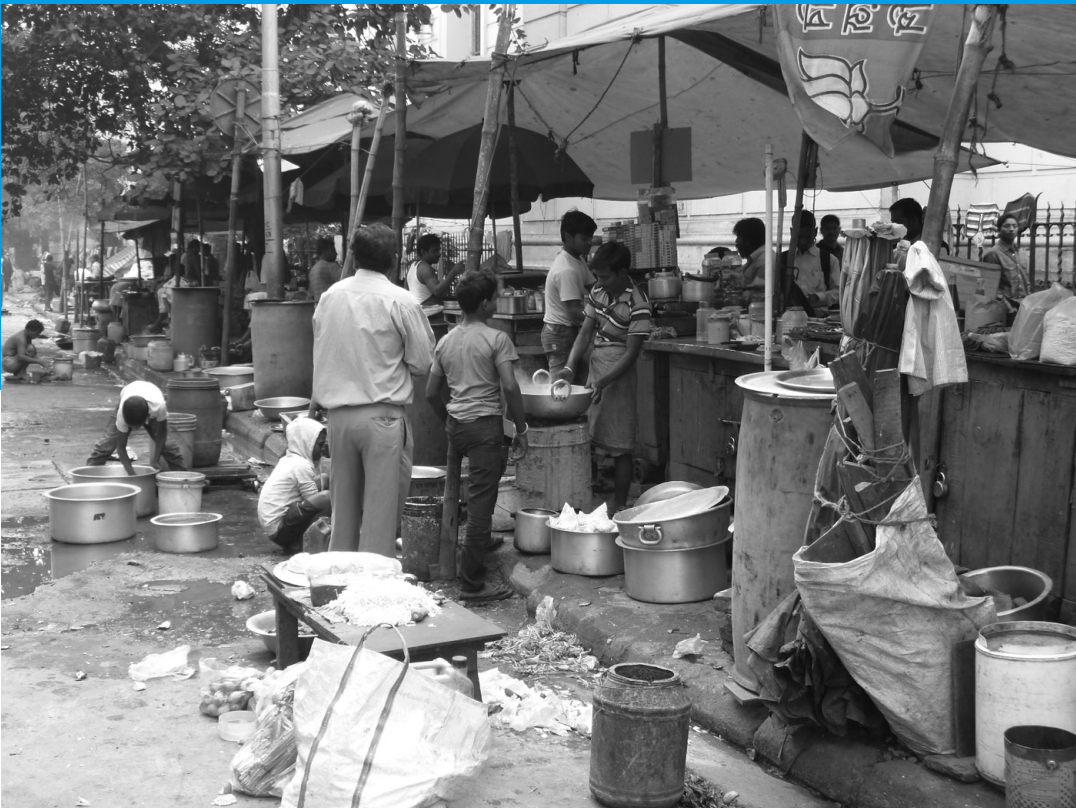
半日かけてインド博物館を見学した。1814年に建てられたインドでも歴史のある博物館だ。人類学、考古学、地理学、民俗学、美術工芸品など、貴重なものが所狭しと並べられている。展示場を見学した後、中庭に出ると、改築工事を行っていた。芝生を剥がして、庭全体を作り変えるらしい。作業は10人ほどの人員で、剥がした土を盥たらのようなものに入れ、それを頭に載せ、数メートルほど運ぶと次の作業員に渡す。これを何度も繰り返して、少しずつ地面を掘り返してゆく。日本なら間違いなく重機を使い、あっという間に終えてしまうところだが、インドではあくまでも人力だ。時間はゆっくりと過ぎている。

庭の工事を眺めていると、衝撃音がして思わず振り返った。足場にしている鉄板が落下して、激しく床に当たったようだ。音のした部屋を覗くと、7、8メートルはあるだろう天井まで組んだ足場の中で少年がしゃがみ込んでいた。周囲の大人は声を掛ける様子もなく、少年は少し驚いたような表情をして、黙ってこちらを見ていた。幸い鉄板は少年に当たらずに済んだが、ヘルメットも被らずに子どもがどうしてこんなに危険な作業現場で働いていたのだろうか。そばにはセメントの小山があり、きっと補修工事の手伝いをしていただろう。コルカタでは、布袋に入った大きな荷物やレンガを運ぶ子どもの姿をしばしば見かけた。

インドで働く子どもの数は統計上435万人(2011年)で、



インド博物館中庭の改修工事。すべて手作業だ



コルカタの繁華街にある屋台の食堂は、朝から忙しい。野菜を洗ったり炒めたり、まだ十代前半と見える少年たちが仕込みに追われていた

2001年の1,266万人から大きく減少した（朝日新聞2014年12月11日朝刊記事）。政府やNGOの取り組みの成果だが、その規制の目をくぐり抜け、工場主は各家庭に仕事を発注するようになったという。おかげで児童労働は見えにくくなったに違いない。露店で売られていた腕輪も、安い工賃でスラム街の子どもがガラスをバーナーであぶって作った代物なのだろうか。そう思うと、電球に照らし出された、ガラスのきらめきがわびしく見える。

無知と貧困の連鎖

一介の旅行者の目に、コルカタは活気にあふれているように映る。人々はより良い暮らしを求めて、日々懸命に生きているという印象だ。かつて日本が、高度経済成長から大量生産・大量消費へとひた走った時代とよく似ている。

インドのモディ首相は州知事として高い経済成長を果たした実績を買われて選出され、国の経済成長を加速し、近代化を推し進めようとしている。しかし、12億を超える国民の3分の1の約4億人が1日1.25ドル以下で生活していると言われ、巨大な貧困層の存在は深刻な問題だ。児童労働も世界で最も多い。

子どもを働かせる親の多くは、自分も学校へ通ったことがないという。その親の下で育った子どもは生活のために働き続け、教育を受けないまま大人になる。低賃金の仕事にしか就けず、貧困から抜け出せない。この「無知と貧困の連鎖」を断ち切るのは難しい。昨年ノーベル平和賞を

受賞したインドの人権活動家カイラシュ・サティヤルティさんは、働かされる子どもたちを救出するためにまず親の説得が大変だと語っていた。

今回の旅で、コルカタから足を伸ばしたダーズリンでは、教育に熱心な地域というだけあって、学校ごとに違う制服を着た子どもたちが元気いっぱい駆け回っていた。貧困層を抱える大都市と地方の差も大きいと感じた。

児童労働は子どもの美点である素直さを利用して、安い労働力とすることだ。学校にも行かず、子どもらしい時代も過ごさずに大人になる彼らの将来が心配になる。今後大きく経済成長を遂げるインド社会のなかで、働く子どもたちはその恩恵を受けることなく、社会の底辺で一生を送ることになるのだろうか。



博物館で遊んでいた男の子たち